

灰の水曜日

2011.3.9

ヨエル 2・12-18

二コリント 5・20 - 6・2

マタイ 6・1-6, 16-18

「シオンで角笛を吹き、断食を布告し、聖会を招集せよ。」第一朗読で聞いた旧約のヨエル預言者のことばは今も生きています。四旬節を迎え、灰の水曜日の今日、私たちも、心の中に響き渡った角笛の響きに応じて、ここに集りました。

「主は言われる。『今こそ、心からわたしに立ち帰れ、断食して、泣き悲しんで。衣を裂くのではなく、お前たちの心を引き裂け。』」。四旬節の始めの今日私たちの主である神は、預言者を通してイスラエルの民に告げたのと同じことばをもって、私たちに呼びかけておられます。「あなたたちの主である、わたしのもとに立ち帰れ。」この四旬節、私たちの日々はこの主のみことばの下にあります。教会の伝統に従って、この灰の水曜日、額に灰を受け、大齋、小齋の掟を守るのも、断食して、泣き悲しんで、心から主に立ち帰るためです。日常の生活の中から主に立ち帰るためには、心を引き裂かねばなりません。日常の生活にべったりと張り付いたままの心では、主に立ち帰ることはできません。

「今や、恵みの時、今こそ救いの日」。四旬節の始めに朗読されることによって、コリントの教会への手紙のこのことばは、特別な響きをもって私たちに迫ります。「神からいただいた恵みを無駄にはしてはいけません。」「神と和解させていただきなさい。」この四旬節、私たちが願い求めるべき恵みは、日常の生活を生きる私たちが、神と和解させていただくことです。和解が成立するためには、当事者同士が互いに和解に向けて心を合わせなければなりません。和解の手は神の側から私たちに差し伸べられているとコリントの教会への手紙は指摘しています。「罪と何のかかわりもない方（神の御子イエス・キリスト）を神は私たちのために罪となさって（十字架の死にわたされました）。私たちはその方（イエス・キリスト）によって、神の義を得て（救いの恵みを与えられているのです）。」その恵みを、心を引き裂くようにして、日々の生活の中に新たな心で受け入れることが、神との和解のために、私たちの側に求められている条件なのです。しかし、その条件を満たすことが、私たちにとっていかに困難であるかを、私たちは日々痛感しているのではないのでしょうか。心を引き裂くようにしてでなくては、日常の生活を生きる私たちは、神が求めておられる和解に向けて歩み寄ることが出来ないからです。

それゆえに、教会は四旬節を定めて、私たちの主である神が、御自分の御子を十字架の死に渡す犠牲を払ってでも私たちに申し出ておられる和解を、私たち

の側からも受けて立つことを求めているのです。

「神と和解させていただきなさい。」とコリントへの教会の手紙は私たちに勧めています。けれども、神と和解させていただくために、私たちの側から準備することは何もないのです。和解のためになすべきことは、神の側で全て整えてくださったのです。そのために、父なる神は、その御子を十字架の死に渡されることさえ惜しまれなかったのです。私たちに求められていることは、そのようにして、神が私たちに差し伸べておられる、和解に向けての恵みのみ手を握りしめることだけです。それだけが、「恵みのとき」であるこの四旬節に私たちがなすべきことなのです。

何故、神はそれほどまでに和解を求めておられるのでしょうか。私たちの側から、父なる神との関係を壊してしまったからです。放蕩息子のように、父なる神の家を、私たちが受け継ぐべき私たちの実家を飛び出してしまっているからです。父なる神の子らとして、そこで永遠のいのちを与えられたはずの父の家を見捨てて、自分たちの方から絶縁状を突きつけてしまっているからです。私たちは多くの場合、普段の生活の中で、自分がカトリックの信者であることを忘れたかのように生きています。周りの人たちと同じように、永遠のいのちよりも、目先のこの世のいのちに執着して生きている私たちがいます。そのことよって、私たちの側から、天におられる父なる神との縁を断ち切って生きていることを認めざるをえません。そのような私たちに、神はその御子の十字架のお姿を示して、御自分のもとに立ち返って、和解に応じるように求めておられるのです。私たちのうちにカトリックの信者としての信仰がまだ生きており、このことが本当に分かれば、私たちの心は引き裂かれるような痛みを感じるはずですが、そこから熱い回心の涙が止めどもなく溢れてくることを感じるはずですが、私たちが神からの和解の申し出を受け入れたしるしとなるはずですが、私たちが迎えようとしているこの四旬節が、私たちにとって、そのような「恵みの時」となることを祈り求めたいと思います。

今日の福音のみことばは、一見すると、燃え上がった私たちの四旬節の想いに水を差すように感じられるかもしれません。しかし果たしてそうなのでしょうか。私たちの回心は、角笛の響きによって呼び集められた、教会の典礼の場だけに限られたものであってはならないのです。一時の心の高揚だけに終わらせてはならないのです。むしろ、他の人々と共に生きる、神を忘れて生きてしまいがちな日々の生活の中で、それと気付かれないほどに深いところにおいて、引き裂かれた心をもって生きることが求められているのです。このような社会の中であって、神の和解の恵みを受けて、神との関係が修復された者として生きようとするなら、私たちの心は引き裂かれざるを得ません。他の人々と同じように生き

ざるを得ない環境の中で、見かけとは裏腹な心の深みにおいて、神を信じる者であるがゆえの、この世を生きる悲しみを知らなければなりません。神を知らない人々の間であって、その人々との良好な関係を求めて神経を使いながらも、神を信じる者たちとして、神への憧れを持ち続けるつらさを知らなければなりません。そのようにして、私たちは心引き裂かれた者たちとなる事が出来るのです。私たちと同じようにこの世の生活を生きた全ての私たちの信仰の先輩たちは、そのような心引き裂かれた人々だったのです。この世の生活の中で、神との和解に向けて旅立つ私たちの先頭には十字架のイエスが立っておられます。イエスもまた、人となってこの世に来られた神の子として、父なる神のみ旨と、その時その時の人々からの求めの狭間を生き、ついには十字架の上で身も心も引き裂かれたのです。この四旬節、そのイエスに従う者たちとして、心引き裂かれた者の苦しみを、この世に生きる信仰者としての心の痛みを、それこそが、隠れたことに目を留められる父なる神への恵みの道と受け止め、生きて行きたいと思えます。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高